ジェンティーレへの旅

中川　政樹

はじめに

第二次大戦末期のイタリアで、連合軍・パルチザンに追い詰められたファシスト政権は北部に逃れ、ドイツ軍の支えによってサロ共和国を設立して、かろうじて命脈を保っていた。1944年4月15日13時30分、フィレンツェの郊外にある高級住宅地・避暑地として名高いフィエソーレのモンタルト館（Villa Montalto）の前に一台の車が止まった。運転手が門の扉を開けるために下車した隙に、学生を装った数人の男たちが車に近づき、窓越しに車内にいた男に名前を確かめるために問いかけた。男が頷くと至近距離から、ピストルの引き金が引かれた。総勢5人と思われる男たちは、すぐさま自転車に乗って逃走した。銃撃を受けた男は即座に病院に運ばれたが、車が病院に着いたときには、すでに死亡していた。

この殺害は、容易周到に準備された暗殺であった。襲撃した5人の男たちは、フィレンツェのパルチザン行動団（Gruppo d'Azione Partigiana＝GAP）の構成員であり、殺害を指揮した男は、地区の共産党員ブルーノ・ファンチウラッチ（Bruno Fanciullacci）であった。暗殺から1週間後の4月22日、反ファシズムの国民解放委員会が「ジェンティーレ事件」と題する声明を発表した。

暗殺された男の名は、ジョヴァンニ・ジェンティーレ（Giovanni Gentile）、親ファシストの思想家として、かつて「ファシスト知識人宣言」を起草し、ファシスト国民文化協会会長、ファシスト政権が企画したイタリア大百科事典の編集長、ピサ高等師範学校校長などを務め、暗殺の前年にはムッソリーニからイタリア・アカデミー総裁に任命されたファシスト文化人の大物であった。

この二人の関係については、近年前後して、後日談が生じた[1]。1994年、第一次ベルルスコーニ内閣の成立後、郵便・通信省はジェンティーレを記念する切手の発行を決定した。それは、国民同盟（Alleanza Nazionale）」すなわちファシスト党の流れをくむ政党の代表者、ジュゼッペ・タタレッラの主導によるものであった。左派から多少の異議は出たものの、さしたる議論もなく切手は発行された。他方、ジェンティーレ殺害の実行部隊の指揮者、ファンチウラッチは、事件後ファシスト側に捕らえられ、拷問を受けた後、ボロネーゼ通りの歩道の上で死体となって発見された。最近、フィレンツェ県のある町の行政当局が街の通りに、彼の名を冠することを決定し、通りの名称として彼の名を刻んだ石碑の除幕式が厳かに行われた。こうして、一方で、ジェンティーレを記念する切手と、他方で、彼を殺害した人物を称える道路石碑が、出現することになったのである。

周知のように、ジェンティーレは、ベネデット・クローチェ（Benedetto Croce）とともに、イタリア理想主義を代表する思想家として、20世紀初頭のイタリア思想・文化に大きな影響を及ぼし、指導的役割を果たしたのであった。しかし、彼が行動主義の理論を確立していく過程でクローチェとの思想的な立場の違いが明白なものとなった。彼は、ファシズムの台頭に際して、この勢力こそ自らの理論の体現者であると看做して、親ファシズムの立場を表明し、さらに、1923年にファシスト党に入党した。その後の経歴が示すように、彼はファシスト文化の最高指導者として活躍し、ファシズム末期のサロ共和国にまで忠誠を示したのであった。

このことによって、ジェンティーレは、反対者から「ファシズムの哲学者」、「俗物的背信者」、「政治的悪党」、「ならず者」、「イタリアの知性全体を堕落させた者」として断罪されたのであった。思想家、学者としてファシズム体制の政治にかかわった彼の殺害は、その意味で、政治的暗殺であった。第2次大戦後の新しいイタリアの知的社会を覆っていたファシズム否定の風潮の中で、彼の哲学をファシズムから切り離そうという試み、あるいは、政治家、哲学者としての彼を批判しながらも、純粋さ、野心、シチリア人の忠実さから、ムッソリーニのワナに掛かった偉大な哲学者として、彼の魂を救済しようとする試みがあったにせよ[(2)]、彼とその思想は、冷遇され，あるいは，否定的にしか評価されてこなかったといってよい。

しかし、19世紀末から20世紀初頭にかけてのイタリア思想界を語るとき、理想主義思想の形成にジェンティーレの果たした役割に触れないわけにはいかない。戦後、年とともにジェンティーレに関する研究は盛んになっており、彼の没後60年を経た今、ジェンティーレの再評価の試みがなされてきている。筆者は、ジェンティーレのより詳細な理解のための第一歩として、彼の思想形成の背後にあるシチリアおよびイタリア南部に注目し、多くが語られていない彼の少・青年期に関する調査を目的として、現地で彼の足跡を実際に辿る「ジェンティーレへの旅」を試みた。当然のことながら、彼の生きていた時代と現在では、状況が大きく異なることは言うまでもない。しかし、文献資料のみに頼る研究では得られないものがそこにあるのではないかという思いが、筆者を動かした。旅は、平成17年1月17日から2月6日にかけて、彼の生地であり、幼年期を過ごしたカステルヴェトラーノ（Castelvetrano）とカンポベッラ・ディ・マザーラ（Campobella di Mazara）、高等学校に通ったトラパニ（Trapani）、そして、ピサ高等師範学校卒業後、高等学校の教師として初めて赴任したカンポバッソ（Campobasso）を中心に行った。本稿はその報告の一部であり、ある意味で、若き日のジェンティーレを訪ねる旅行記である。

1．カステルヴェトラーノ

ナポリのカーポデキーノ空港を14時15分に飛び立ったアルピ・イーグル1336便はテレニア海を越えて、約1時間後にパレルモの西32kmのプンタ・ライジにあるファルコーネ・ボルセッリーノ空港に着陸した。冬も暖かいと言われるシチリアでも、さすがに曇りの日は肌寒い。空港のすくそばに聳え立つ岩山の頂上部は雪を被っており、海辺のためか風も強い。空港からは、バスに乗り約1時間程でパレルモ市内に入る。シチリア島の西部に位置するパレルモは、現在人口約75万人の島内最大の都市である。シチリアは地中海交通の要所に位置しているため、古代より多様な民族の侵入に晒された。フェニキア人によって建設されたパレルモは、シチリアがその後ローマ、アラブ、ノルマンなどの支配下に置かれた時も、常にシチリアの中心であった。

シチリア西部で少年時代を過ごしたジェンティーレの面影を訪ねる旅は、シチリアの空と海の玄関口であるパレルモから始まる。パレルモを起点にして西、或いは南西方面は鉄道、車利用ともにアクセスが良い。世界的に名高い食後酒を生産するマルサーラ（Marsara）、イスラム勢力がシチリア進出の足がかりとしたマッザーラ・デル・ヴァッロ

(Mazara del Vallo)、シチリア最古の温泉地もあるシャッカ (Sciacca) と個性豊かな町が海岸線に続く。

この旅行の当初の計画では、パレルモからジェンティーレの生誕地であるカステルヴェトラーノを訪れる予定であった。カステルヴェトラーノは、パレルモからイタリア国鉄の準急列車に乗ると約２時間半で行くことができる。ところが、前もって調べたところ、カステルヴェトラーノの街中にはホテルが一軒もないということが分かった。市の中心部から約１０キロ南の海岸沿いに行くと、古代ギリシャ時代の遺跡のあるセリヌンテやトレ・フォンターネに、いくつかリゾート・ホテルがあるが、市内からは遠く、日に数本あるバスの便も悪い。

ほとんど観光客が行くことのないカステルヴェトラーノのような町については、イタリアでも情報は乏しい。ホテルが無いとすると、近くの町に宿を求め、そこから出かけるしかない。近くの町といえば、マザーラ・デル・ヴァッロであるが、未知の町であり、ここも情報に乏しい。そこで、マルサーラ・ワインの生産で有名なマルサーラに宿を求めることにした。マルサーラはかつてフェニキア人が建設した町であったが、その後、サラセン人が侵略して古代の町を造り変え「マルサ・エル・アラー」(アラーの港) と呼び、これがマルサーラという地名の由来となったと語り継がれている。こうして、マルサーラの駅近くの安宿に投宿し、翌朝することになった。

次の朝、７時４５分、マルサーラの駅は、通勤や通学の人たちで賑わっていた。ほぼ満席の乗客を乗せて、8 時 00 分に発車した列車は、沿線にオリーヴ畑やかんきつ類の林が続く一帯を走り、20 分でマザーラ・デル・ヴァッロに着く。この町の沖合からは、1998 年に、紀元前３世紀～２世紀の製作と推定されるブロンズ像「踊るサテュロス」が引き上げられ、世紀の大発見として話題になった。この像は、イタリア中央修復研究所で４年間かけて修復され、同市のサテュロ博物館に展示されている。しかし、サテュロス像は、2005 年愛知万博「愛・地球博」のイタリアパビリオンに展示されることになっており、現在、すでに日本に送られているという。日本では、愛知万博に先立って、東京上野の東京国立博物館で、２月 19 日から３月 13 日まで、「奇跡の発見！2000 年の眠りから醒めた地中海の至宝」と唱って「踊る物サテュロス」特別展が開催されたので、日本の人にも馴染みになっている。

マザーラ・デル・ヴァルロで通勤・通学者の大半が下車すると、車内は乗客も疎らになり、今までの喧騒が嘘のように閑散としてきた。カンポベッロ・ディ・マザーラの小さな駅を過ぎ、５分程で終点のカステルヴェトラーノに到着した。駅前はほとんど人影がない。古くからのイタリアの町がそうであるように、駅前が町の中心地や繁華街であるとは限らない。この町は、なだらかな丘の上にあり、駅は丘を下ったところにある。

出生証明書 (Atti di Nascita) によると[3]、ジョヴァンニ・ジェンティーレは、この町で 1875 年５月 29 日午後 11 時、薬局を経営する同名の父ジョヴァンニ・ジェンティーレと元小学校教員の母テレーザ・クルティの間に 10 人兄弟の第８子として生まれた。彼の家は、その土地の比較的豊かな中産階級に属していた。彼の誕生後、家族が、カステルヴェトラーノ近郊の町カンポベッロ・ディ・マザーラに移ったため、そこで幼年期を過ごし、1881 年 11 月から 1886 年７月までの間、小学校に通った。その後、1886 年 11 月から 1891 年７月まで、カステルヴェトラーノの中学校で学んでいる。

駅から坂を上がって旧市街地に入ると、街の中心部にあるガリバルディ広場の脇に、ジェンティーレの胸像がある。さらに進んで市立博物館に、この街に詳しいミケーレ・インデリガート氏を訪ねる。氏は、この街には、ジェンティーレの血縁者が今も住んでいると言って、系図を書いてくれる。それによると、ジェンティーレの弟、ジュゼッペに、ジョヴァンニという息子がおり、その娘で、現在 65 歳のアントネッラ・ジェンティーレ女史が、ガリバルティ広場近くのコルドヴァ通りに住んでいるという。インデリガート氏は、アントネッラ女史に電話をかけてくれたが、あいにく不在であった。彼女の家は、ジョヴァンニ・ジェンティーレの母、テレーザ・クルテ

ィ縁の家であるので案内するという。その家は、ガリバルディ広場に続くウンベルト１世広場からコルドヴァ通りにおよそ１０m入ったところにあった。手入れされていない古い門のなかに昔ながらの館が見える。それをカメラに収めると、氏は、次はジェンティーレに縁の深い学校に案内するという。歩くこと数分で、「ジョヴァンニ・パンタレオ文科高等学校及びジョヴァンニ・ジェンティーレ師範学校」(Liceo classico Giovanni Pantaleo e Istituto Magistrale Giovanni Gentile) という看板が壁に埋め込まれた建物の前に着いた。立派な校舎の前で、彼は「実は、私もこの学校に通っていたんだ」と幾分得意そうに言い、出会う人たちに会釈しながら校内を案内してくれる。学校の１階に、ジェンティーレの肖像画が正面に飾られた大講義室があり、彼がこの学校の精神的支柱になっているかのように感じられる。

２.「ジョヴァンニ・ジェンティーレ没後60年」連続講演会

校長室では、昨年９月１日にマザーラ・デル・ヴァッロのバッラトーレ理科高等学校から着任したという恰幅のよい赤ら顔のフランチェスコ・フィオルダリーゾ校長と数名の教職員が迎えてくれた。ここで、ジェンティーレに関する多くの資料を与えられた。彼の着任を報じた『ラ・シチリア (La Sicilia)』誌[4]によると、哲学・歴史学で学士号を取得した後、市および県の公教育評議員を勤め、1995 年には市民の反マフィア意識を喚起した功績で、カヴァリエーレ勲章を受章している。彼は、就任にあたって次のように語っている。「カステルヴェトラーノへの私の赴任は、出身地への帰還です。生徒や学校への奉仕に挺身してきた経歴の完成です。パンタレオ高等学校とジェンティーレ師範学校が、かつて獲得した高い威信を保持しつづけるために、全精力を注ぎたいと思います。」

彼が、現在、学校を挙げて推進している企画に、ジョヴァンニ・ジェンティーレ没後 60 年に際して、「ジェンティーレの再評価をめざして」の一連の講演会・会議がある[5]。

「ジョヴァンニ・ジェンティーレ没後 60 年」記念、「哲学者ジョヴァンニ・ジェンティーレに関する連続講演会」と銘打って、著名なジェンティーレ研究者による一連の講演会が進行中であった。

講演会日程表によると、いずれもジェンティーレ研究の第一人者による次のような講演会と全体会議が行われていた[6]。

2004 年 10 月 30 日
アンティモ・ネグリ (ローマ大学)
「ジョヴァンニ・ジェンティーレと自由社会主義的コーポラティズム」
2004 年 11 月 27 日
ダニエラ・コリ (フィレンツェ大学)
「ジョヴァンニ・ジェンティーレの政治観」
2004 年 12 月 18 日
マルガレーテ・ドゥルスト (ローマ・トル・ヴェルガータ大学)
「ジョヴァンニ・ジェンティーレの教育観」
2005 年 1 月 28 日
エルヴェ・A・カヴァッレェーラ (レッチェ大学)
「魂の表現としての身体、ジョヴァンニ・ジェンティーレにおける芸術観」
2005 年 2 月 19 日
ジュゼッペ・ニコラーチ (パレルモ大学)
「ジョヴァンニ・ジェンティーレの哲学観」
2005 年 3 月 12 日
ピエトロ・ナスタージ (パレルモ大学)
「ジェンティーレと数学者たち」
2005 年 4 月 16 日
アレッサンドロ・カンピ (ペルージア大学)
「ある哲学者の必然的な死」
2005 年 5 月 30 日
ファイナル・コンヴェンション
出席予定者
ジョヴァンニ・ジェンティーレ・ジュニア (レ・レッテレ出版社・フィレンツェ)、レーモ・ボデイ (ピサ大学)、フランコ・カンビ (フィレンツェ大学)、パオロ・シモンチェッリ (ローマ、ラ・サピエンツァ大学)、フルコ・ランカスター(同)、ジャン・フランコ・ラーミ(同)、ニコラ・トランファリア (トリーノ大学)、ジ

ャコモ・マッラマオ（ローマ第３大学）、フランチェスコ・リッオ（メッシーナ大学）、アッリーゴ・コロンボ（レッチェ大学）。

以上のような連続講演会は、様々な分野・角度から、ジェンティーレの思想・理論を論ずるものであって、大変興味深いものであるが、滞在日数との関係で参加することができなかったのは残念であった。

また、ジェンティーレに関して、インデリガート氏は、「ジェンティーレの政党」が、明日から２日間の予定で、この地区の党大会を市内のマルコーニ劇場で開くという。街角に多くのポスターが貼られており、そこにはガスパッリ（Gasparri）と大きく印刷されている。ガスパッリとは、フォルツァ・イタリアを中心とする右派連立政権、ベルルスコーニ内閣の郵便・通信大臣（Ministro delle Poste e delle Telecomunicazioni）で、地元選出の大物議員である。彼は、2003 年 12 月に成立したガスパッリ法、すなわち「テレビ・ラジオ制度再均衡法案」で、わが国でもその名が知られることになった[7]。
ガスパッリが主役となって開かれるこの地区の党大会とは、４月の選挙に向けての「国民同盟（Alleanza Nazionale）」、すなわち、ファシスト党の流れを汲む政党の集会であった[8]。その意味では、確かに「ジェンティーレの政党」と言うことができる。ジェンティーレの出身地では、ファシスト党の流れを汲む政党が大きな支持を得ているようである。

３．カンポベッロ・ディ・マザーラ

次いで、筆者は、ジェンティーレが幼年期の数年を過ごしたカンポベッロ・ディ・マザーラを訪れることにした。カステルヴェトラーノ駅の出札口で、カンポベッロへの切符を買おうとすると、駅員が「なぜカンポベッロへ行くのか」と怪訝そうな顔で尋ねる。詳しく説明する必要もないので「街に興味があるのだ」と適当に答えると、理解しがたいという表情である。確かに、行き先は外国人が観光に行くような町ではない。しかも、帰りの時刻が決まらないので「片道切符を」と言ったのに、わざわざ「往復切符か」と聞いてくる。

その理由は、カンポベッロの駅に降り立って分かった。駅は無人駅で荒れ果てて、切符の自動販売機は壊れている。そして、狭い駅前には廃墟のような建物があるだけで、人影はない。同じ列車から降りた少年に、切符はどこで買えばいいのかと尋ねると、旅行代理店だと言う。それは街の中心部にあるとのことであった。

バスもタクシーも見当たらない。中心部へは、車が砂埃を立てながら走る建物のまばらな道をおよそ 30 分歩くことになる。この様子は、ジェンティーレが、恩師ヤーヤに宛てた手紙に「カンポベッロでは、道の砂埃が馬車の轍やラバの脚の下で息詰まるような白い雲となって絶えず舞い上がります[9]」と書いた百年前の状況と少しも変わっていないように思え、まるで歴史が止まってしまっているかのような不思議な感じである。

ピサ高等師範学校に在学中の 1895 年夏、この町に帰郷しているが、この時、彼が見たものは、兄弟ガエターノの死によって悲しみに打ちひしがれた家族の姿であった。また、彼自身も健康が優れず、以前からの貧血症による心収縮の診断を受けたのであった。さらに、不幸が家族を襲った。1898 年、薬局を経営していた父が、法律に違反して薬局を工房として営業しているとして告発されたのである。家族、特に弁護士であった長兄の勧めにより、父は薬局を閉じ、家族はカステルヴェトラーノへ転居することになった。この一件で、父は一種の被害妄想に駆られ、彼を告発した連中や彼に仕事を辞めることを勧めた長兄への怒りを爆発させて抑鬱症状に陥った。そして、父は、家族の希望に反して、家族と離れて薬局を開くためにカンポベッロに帰っていった[10]。父の精神的錯乱や家族の分裂に加え、シチリアに戒厳令が発せられる暴動[11]の原因となった経済的危機も、彼の家族の生活に深刻な影響を及ぼしたであろうと推測されるが、それについての記述はどこにも見られない[12]。

カンポベッロは、ジェンティーレにとって、楽しい思い出のある故郷ではなかった。この

小さな町で、父がかつて薬局を開いていた場所を訪ねることができた。近くの人の記憶からは、ジェンティーレは消えているようであった。100 年以上の年月の経過によってカステルヴェトラーノとは違って、ジェンティーレは忘れられた存在になっていた。

4．トラパニ

カステルヴェトラーノでの学業を終えると、ジェンティーレは、1891 年県都トラパニにあるエクシーメネス文科系高等学校（liceo classico Ximenes）に進学し、1893 年までトラパニで学生生活を送った。パレルモからの準急列車が、トラパニの街に近づくと、右手のサン・ジェリアーノ山の頂上に中世の街並みを残した観光地、エリーチェの町が見える。シチリアの最西端に位置するトラパニは、鋭角の３角形の形をして海に望んでおり、旧市街地の南側には港がある。その歴史は古く紀元前から地中海有数の港町として、塩田と塩の交易で栄えてきた。現在もトラパニから南のマルサーラまでの沿岸にサリーネ(Saline)と呼ばれる塩田があり、この街の重要な産業となっている。

トラパニの街は、古くからの町並みが新しくきれいに整備されており、シチリアや南イタリアの都市にある雑然としたうす汚さは、感じられない。青い海を背景にした街並みは、一種絵になる風景を作りだしている。鉄道駅から西に、海に突き出た旧市街地の方向に 15 分ほど行くと、旧市街地の中心であるサン・アゴスティーノ広場にでる。さらに西に伸びるヴィットリオ・エマヌエーレ大通りに入ると、壮大な大聖堂が通りに面して右手に見える。その隣に、シーメネス高等学校がある。建物の入り口に、「第 60 学区　国立高等・後期中等学校『レオナルド・エクシーメネス』トラパニ」(Distretto scolastico N.60. Liceo Ginnasio statale “LEONARDO XIMENES” TRAPANI）という黄銅製の小さな看板が壁に埋め込まれている。大きな建物であるが、それに比べて看板が小さいためか、うっかりすると見落としてしまいそうになる。

校名に冠された人物、レオナルド・エクシーメネスは、1716 年トラパニに生まれ、1786 年フィレンツェで没したイエズス会系修道院の修道士である。彼は、1756 年にフィレンツェのサン・ジョヴァニーノ修道院に天文台を再建し、また、有能な水利工学技師としてトスカーナ湿地帯やビエンティーナ沼の干拓に携わった。 さらに、橋の設計や道路建設の指揮に力を注いだ。こうして、彼は、天文学、水力学、幾何学、物理学及び力学の分野で活躍し、18 世紀におけるトスカーナ地方の最も重要な科学者の一人とされている [13]。

ジェンティーレは、この学校に 1891 年から 1893 年の３年間在学したが、この間の詳細な状況を伝える文献は乏しい。いずれの書も優秀な成績で学業を修了したことを伝えるのみである。トラパニの街でも、100 年も前のジェンティーレの学生生活は、人々の記憶から消え去っていた。トラパニでの彼の学生生活の詳細を掘り起こすことができないまま、シーメネス高等学校を後にした。

高等学校で最終学年に上がり、卒業試験に合格した後、彼の優秀さを認めていたギリシャ語教師、ガエターノ・ロータ・ロッシの勧めによって、彼は、パレルモで行われたピサ高等師範学校（Scuola Normale Superiore di Pisa）の選抜試験を受験した。この学校は、フランスの高等師範学校(École normale supérieure) を模して、ナポレオンによって設立され、イタリアのエリート養成機関の一つとされていた。彼はその試験に合格し、入学が認められた。こうして、ジェンティーレは、1893 年 11 月、シチリアを後にして、ピサ高等師範学校の文学部に入学した [14]。彼の思想形成は、ピサでの勉学によるところが多いと考えられるが、今回の旅はイタリア南部に限ったため、ここでは触れないこととする。

5．カンポバッソ

1897 年に「ロズミーニとジョベルティ」に関する卒業論文を提出後、彼は 10 月にアブルッツォ（Abruzzo）州 [15] のカンポバッソにある王立マリオ・パガーノ高等学校の哲学教員の職を得て赴任した。カンポバッソへの旅は、

ローマから始まる。

1月中旬、月曜日の朝8時30分、ローマ・テルミニ駅の発着表示盤には、多くの列車に「運休(SOPPRESSO)」と表示されていた。時折流される駅構内のアナウンスに耳を澄ますと、鉄道員のストライキによる列車の運行停止で、中・長距離列車は全面的に運休らしい。いつもは込み合う駅ホームに、今日ばかりは乗客は少なく、日本のように懇切丁寧な駅のアナウンスはないので、途方もなく佇んでいる。駅のコンコースでは、テレビ・ラジオ局のインタビュアーが、ストライキに関する意見を聞いて回っていたが、列車待ちの乗客たちは、いつものように仕方ないというあきらめ顔で言葉少なである。ストライキは、テレビのない安ホテルに投宿していた筆者にとっても寝耳に水であったが、幸いなことに9時 15 分発のカンポバッソ行き準急列車は運行と表示されている。しかし、始発駅であるにもかかわらず、8番ホームに列車は入ってこない。9時10分、突然、発車時刻の表示が9時35分に変更された。待つこと10数分、さらに発車時刻が9時55分に変わる。
ところが、9時50分、突然、発着表示盤の8番ホーム発カンポバッソ行き列車は、9番ホーム発カッシーノ（Cassino）行き準急列車と表示が変わった。数少ない乗客たちは、9番ホームへと急ぐ。周りの人たちに聞いてみると、カンポバッソ行き列車は、カッシーノまでしか行かないという。そこから先はどうなるのか、駅員や車掌に聞いてもわからない。

カッシーノは、ローマから列車で1時間半、カンポバッソへの途中の町であるが、ローマから電話でホテルの予約もしているため、ともかく、カンポバッソの近くまで行って、そこから先はなんとかなるだろうと、不安を抱えながら、急いで列車に乗り込んだ。1両の車内を1等と2等に仕切った 25 席ばかりの2等の車内には、5人の乗客しかいない。
列車がようやく9時55分に発車すると、まもなく恰幅のよい車掌が、乗客の一人ひとりに「どこまで行くのか」と聞きに回って来た。5人のうち、カンポバッソまで行くのは2人のようだ。カッシーノから先の旅程をどうするかの問題で頭の中が一杯になり、外の景色も余り目に入らないが、のどかな田園地帯を一路南下し1時間近く走ったところで、再び車掌がやってきた。「この列車はカンポバッソまで行くことになった」という。何と人騒がせなと思いつつも、先程までの不安は消散し、これでひと安心となると、車窓の景色が急に晴々としてきた。まもなく、小高い丘の上にあるカッシーノの町と山上のモンテ・カッシーノ修道院が見えてきた。

カッシーノは、第2次世界大戦末期のイタリア戦線において、シチリアに上陸し北上する米英連合軍とその進撃をここでくい止めようと強固な防御線を築いていた独伊連合軍との激烈な戦闘が行われたモンテ・カッシーノの戦いで有名な町である。

カッシーノを過ぎて少し行くと、列車は支線に入り、北へと向きを変えてなだらかなアペニン山脈の山を登っていく。遠くに山頂に雪を被った山々が見え、モリーゼ（Molise）州に入る。モリーゼ州は、1963年に北隣のアブルッツォ州から分離独立した小さな州で、面積は 4,438 k ㎡、アルプスの南麓にあるヴァッレ・ダオスタ（Valle d'Aosta）州についで2番目に小さい。列車は、午後1時過ぎに、モリーゼ州の州都、カンポバッソに到着した。カンポバッソは、なだらかな丘の上にある人口約5万人の街である。街の周囲には、広々とした畑や牧草地が広がっており、近くには雪を被ったアペニン山脈の山々が見える。この日は風も強く、標高約 700mともなれば、駅に降り立つとさすがにローマよりは寒い。旅行前に調べたところでは、モリーゼ州は地震の多い地域である。近年では、2002 年 10 月 31 日 、カンポバッソ付近で発生した地震では、震源深さ 15km、震度8を経験している[16]。この町には、度重なる地震による家屋・建物の損壊のため、歴史的中心地（Centro storico)と呼ばれる旧市街地以外の街並みは近代的な建築物が多い。古く由緒ある建築物が少ないためか、観光とはほとんど無縁の都市である。

1897 年 10 月、ジェンティーレがこの町に足を踏み入れた当時、アブルッツォやモリーゼは、イタリアで最も貧しい地方の一つであったが、彼の赴任前の数年間、カンポバッソ

はちょっとした建築ブームが起こっていた。アドリア海に面したテルモリ（Termoli）とカンパーニャ州の内陸部にあるベネベント（Benevento）間の鉄道建設が呼び水となって、この沿線に位置するカンポバッソでは、ブドウ畑と果樹園に挟まれた丘の南斜面に這いつくばっている古い市街地、チッタ・ヴェッキア（Città vecchia）の傍らに新しい街が生まれた[17]。ジェンティーレは、この新しい街が気に入ったようで、カンポバッソに到着直後、恩師のヤーヤに次のように書き送っている。「新しい側はこの町のよりよい所です。ここには、いくつかの学校の建物、すべての公共施設、交通の中心地があり、人々が散歩に赴く広場に面して小さな劇場までもあります。[18]」

駅前のクオーコ広場からヴィットリオ・ヴェネト通りを北へ5分ばかり行くと街の交通の中心地、ガブリエーレ・ペーペ広場（Piazza Gabriele Pepe）に出る。この広場の北はずれにジェンティーレが「小さな劇場」と書いたサヴォイア劇場（Teatro Savoia）があり、その北側には丘の上に向かって旧市街地（Centro storico）、チッタ・ヴェッキアが広がっている。旧市街地は迷路のように階段状の道が入り組んでおり、12世紀から14世紀にかけての中世の町の姿をそのまま伝えている。丘の頂上には、ロンゴバルド時代に創建され、15世紀に再建された重厚なモンフォルテ城（Castello Monforte）あり、町全体を俯瞰することができる。

ジェンティーレが奉職することになったマリオ・パガーノ高等学校は、ガブリエーレ・ペーペ広場の角に面しており、堂々たる校舎は大きな木々に囲まれ、入り口には、「マリオ・パガーノ国民寄宿学校（Convitto Nazionale Mario Pagano）」の看板が掲げられている。市の案内書によると、この建物はカンポバッソの最も代表的な建築物の一つであり、中央部分が3階建て、両脇部分が2階建ての美しい建物である。この学校は、1816年ブルボン家のフェルディナンド4世の勅令で、モリーゼ地方の公教育のために「王立サムニウム学校（Real Collegio Sannitico）」の名前で設立された。その後、1857年フェルディナンドII世によって、高等学校に格上げされ、1861年に後期中等・高等学校となった。1865年にヴィットリオ・エマヌエーレII世の勅令により、当時の文部大臣によって、この学校の名称にマリオ・パガーノの名が冠せられた。

校名の由来となったマリオ・フランチェスコ・パガーノ（Mario Francesco Pagano）は、1748年にバジリカータ州ポテンツァ県の1都市、ブリエンツァ出身の法律家・政治家である。彼は、ナポリ共和国臨時政府のために憲法草案を起草した。しかし、1799年共和国の崩壊とともにブルボン王国に引き渡され、絞首刑に処せられ、生涯を終えた[19]。

当時と変わらぬこの建物にジェンティーレは好印象を持ったようである。ルイジ・ガンベラーレ校長と同僚たちは、彼を温かく迎えた。前任者の借りていた住まいを引き継ぐことができたため、住居の困難もなかった。ここで彼は、ベルトランド・スパヴェンタの著作の収集、史的唯物論、歴史の概念、芸術哲学に関する考察など、当時心を奪われていた研究を継続することができた。マリオ・パガーノの図書館に所蔵されていない書物については、クローチェが私蔵本を提供してくれ、また、ダンコーナが高等師範の蔵書を利用する便宜を図ってくれた[20]。こうして、彼はカンポバッソで地理的条件を除けば、十分満足しうる研究生活を送ることができた。

彼のこの学校での教育活動については多くは伝えられていないが、のちの研究活動につながっていると思われる次のような逸話が残っている[21]。着任後、授業のテキストを選定する必要があった。彼は、20年以上前にナポリで発行された新カント派の哲学者で、スパヴェンタやヘーゲルの強い影響を受けたフランチェスコ・フィオレンティーノの『高等学校用・哲学講義』が適当だと決めた。ところが、この決定が一寸したいざこざを引起すことになった。前年のこの授業の担当者が、転任を予期せず、すでに生徒たちに、1870年代の初めにミラノで出版されたカルロ・カントーニ著『哲学基礎講義』の購入をすでに命じていた。書店は必要部数を発注してしまっ

ていたため、損害を訴えに来校し、生徒たちの幾人かは既に購入済みであった。当惑した校長は、彼にテキストを変えないか、あるいは、1 年生の生徒にだけフィオレンティーノの本を採用するよう求めた。彼はしばし迷ったが、翌日、彼の決断のとおりに新しいテキストを採用すること、そして、必要とあれば、その理由を生徒たちに説明することを明らかにした。彼によれば、カントーニはイタリアの高等学校における「哲学の衰退に繋がる悪しき手引書を書いた」[22]。カントーニはフィオレンティーノと同様に新カント派の哲学者であるが、彼の書は、ヴィーコ、ヘーゲルそしてスパヴェンタといったイタリア観念論の祖たちの理論に全く冷淡であった。この書物が若者の手に渡ることは、哲学教育にとって有害である。校長は、彼の強い主張が単に彼の頑固さによるものではなく、正当な理由によるものであることを理解し、教育計画を決めるための校内会議において満場一致で承認された。このことは、自己に忠実で安易な妥協を嫌う彼の性格が強く表れた出来事として伝えられているが、他方で、高等学校における哲学教育の改革を観念論の再生への方向で行うことを示したものであり、彼のその後の研究のグランドデザインが表れているのである。

カンポバッソでの奉職中、ジェンティーレの関心は、マルクスとスパヴェンタに関する研究と歴史の概念と芸術の本質の研究に向けられた。その成果は、『マルクスの哲学（*La filosofia di Marx*）』（1899）と『ヘーゲル弁証法の改造（ La riforma della dialettica hegeliana）』（1913）などで発表された。これらは、その後の理論体系の輪郭を描くものとなっており、理想主義思想構築の骨組みとなっている。この点については、別の場で詳述することにしたい。

おわりに

1月中旬から2月初旬にかけてのカステルヴェトラーノ、カンポベッラ・ディ・マザーラ、トラパニ、そしてカンポバッソといったシチリアとイタリア南部の町に、若きジェンティーレの足跡を辿る駆け足の旅は、彼の思想形成のバックグラウンドを探求し、掘り下げてみようという試みであった。

イタリア理想主義を代表する思想家であるクローチェも、アブルツィに生まれ、ナポリでその知的活動を展開した。両者が、ナショナルな、あるいは、コスモポリタン的な思想の発展をめざしたと考えるにしても、ともに、南部的背景をその思想の形成と発展に見出すことができる。両者の出会いとその後の思想形成、そして、その発展は、筆者のこれからの研究テーマとするところである。

ジェンティーレの思想の原点は、これらシチリアとイタリア南部の地域にあるといわれるとき、実際に足を運んだことによって得られた印象・知識および数々の資料は、彼の思想を理解するに不可欠の大いなる財産を与えられたと考えられよう。このような満足のうちに、シチリアとイタリア南部に若きジェンティーレを訪ねる旅を終えることができた。この成果は、ジェンティーレとイタリア理想主義の政治理論の研究において、他日、あらためて明らかにしたいと強く思う。

注

（1）S.Romano, *Giovanni Gentile. Un filosofo al potere negli anni del regime,* Milano, 2004, p.7.

（2）Cf. D.Coli, *Giovanni Gentile*, Bologna, 2004, pp.13－14.

（3）Atti di Nascita. Cf. M. di Lalla, *Vita di Giovanni Gentile,* Firenze, 1975, pp.5－6.

（4）*La Sicilia, 02 settembre 2004,* Trapani, p. 87.

（5）「カステルヴェトラーノ出身の哲学者、ジョヴァンニ・ジェンティーレの再評価（La Rivalutazione del Filosofo Castel－vetranese Giovanni Gentile）」cf. HERMES, n.142－9 del 10/12/2003.

（6）参照、講演会日程表パンフレット（da GIOVANNI GENTILE SEMINARIO DI STUDI, Calendario dei seminari tematici）

（7）イタリアでは、国営の RAI 1及び2の2

つの放送局の他、４つの民放テレビがある。そのうち、レーテ（Rete）４，カナーレ（Canale）５，イタリア（Italia）１の３社をメディア王として知られるベルルスコーニ首相の経営するメディアセット社が所有している。これについては、有力政治家によるテレビを私物化・メデイアの独占支配は許せないとして批判が高まっている。ところが、ガスパッリ法は、逆にメディアの寡占を禁止する現行法を緩和しようとするもので、この法律が、議会を通過したことにより、今後、ベルルスコーニ首相がますます電波の支配権を拡大する可能性が、生じたと言われている。

（８）この党は、かつてイタリア社会運動（Movimento Sociale Italiano）が党名を変更したものである。

（９）G.Gentile-D.Jaja, *Carteggio, I*, Firenze 1969, p. 10. 1895年8月20日付け書簡。

(10) S.Romano, *op.sit,*. p. 57.

(11) 当時、イタリアは、農業恐慌やフランスとの関税戦争によって、経済的な打撃を受けていた。とりわけ、シチリアでは、農業に打撃が大きかった。1893年にファッシ・シチリアーニによる大規模な労働運動が展開され、農民暴動が発生した。

(12) S.Romano, *op.sit,*. pp.16－17.

(13) Cf. *Enciclopedia Garzanti Universale,* Milano, 1969. p.1484.

(14) S.Romano, *op.sit,*. p.18.)

(15) カンポバッソは、現在モリーゼ州の州都であるが、１９６３年に北隣のアブルッツォ州から分離独立した州であり、ジェンティーレが赴任した当時は、アブルッツォ州に属する町であった。

(16) 参照、鍬田泰子、「Molise, ITALY の地震に関する速報」、日本地震工学会、Nov. 5, 2002.

(17) S.Romano, *op.sit,*. pp.65－66.

(18) G.Gentile-D.Jaja, *op.sit.*, pp.220－221.

(19) Cf. *Dizionario dei personaggi storici.* Bologna, 1965, p.241.

(20) S.Romano, *op.sit,*. pp.65-66.

(21) S.Romano, *ibid,*. pp.67-68.

(22) Gentil－D'Ancona, *Carteggio,* Firenze, 1973, pp. 92－93.